

# 小学校の水泳授業とスイミングスクールの指導内容 —望ましい連携について—

中山 拓哉 (生涯スポーツ学科 学校スポーツコース)

指導教員 黒澤 寛己

キーワード：小学校，水泳授業，スイミングスクール，指導，連携

## 1. 緒言

本研究では、水泳指導における小学校とスイミングスクールの望ましい連携について検討する。近年、小学校の水泳授業での事故などによって小学校教師の水泳指導力が問題視されている。本研究では、小学校へのインタビューを通じて望ましい連携方法について提案する。

## 2. 研究方法

本研究の研究方法は、まず最初に、小学校の水泳授業で基本的な泳ぎを始める中学年（3・4年）から高学年（5・6年）の指導について先行研究や先行事例を調査する。そして、実際に小学校の教員やスイミングスクールの指導員にインタビューを行う。

## 3. 結果と考察

先行研究によると、野村他(2014)の調査結果からは、泳力が高くなるほど指導に関する困難度は低くなること、クロール指導に関しては50m以上泳げることが困難度を低くする一つの要因となっていること、平泳ぎ指導はクロール指導よりも困難度が高いということが分かっている。よって小学校教員はクロール・平泳ぎともに50m以上泳げるようになることが必要であると考えられる。さらに事例を調査すると、「講師派遣型」「会場提供型」「教員講習型」の3つの連携方法があることが明らかとなった。その中で最も望ましい連携方法は、「講師派遣型」であると考えられる。その理由は、「会場提供型」だと児童の移動が大変だというデメリットがある。このことから、十分に授業時間を確保することが難しい。以上のことから、「会

場提供型」は望ましい連携とはいえないであろう。同様に「教員講習型」についても教員の時間確保が問題となるため、一番時間的に適切なのは、「講師派遣型」である。「講師派遣型」であれば、児童が移動する必要がないので時間的にロスがなくなる。これらのことから、「講師派遣型」が最も望ましい連携となる。

## 4. まとめ

戦後、文部省（当時）の指導などにより全国の小中学校にプールの設置が進められるとともに、学校教育に水泳の授業が採用され、全国に普及するようになっていった。現在では、水泳の授業が全国の学校で行われている。しかも、スイミングスクールと連携を行っている小学校もある。連携を調べていくうちに、3つのタイプが存在することが明らかになった。3つのような類型の中では、本研究の結果から「講師派遣型」が最も望ましい連携であると考えられる。以上のことから、小学校とスイミングスクールの連携については「講師派遣型」を中心に今後は学校現場の現状に即した研究が必要であると考えられる。

## 引用・参考文献

- 森他(2003) 水泳における学校体育と社会体育の連携 新潟大学教育人間科学部紀要 p 1 4 3 - 1 5 3  
野村他(2014) 小学校教員の泳力別にみた水泳指導に対する困難度 岐阜大学教育学部研究報告. 自然科学. p 1 2 7 - 1 3 1  
文部科学省 小学校学習指導要領解説 体育編